

地域産業動物獣医療に関わる家畜保健衛生所の現状と課題について（2023）

丹後家畜保健衛生所

○坂田貴洋 種子田功

【はじめに】2007年～2008年にかけてNOSAI 京都から丹後地域の診療業務を引き継いだことで、当所の家畜診療にかかる業務量が増加。2008年に当所田中らにより現状と課題について報告した。今回、家畜診療業務が完全移行した2010年度以降の家畜診療実態について報告する。【調査方法】2010年度～2022年度を調査期間として、2008年報告時の課題であった疾病予防対策の実施状況と、期間中の診療発生内訳（初診）について調査した。【結果】疾病予防対策として、動力噴霧器等を用いた牛床および空間消毒の徹底、搾乳衛生指導、子牛疾病予防ワクチンプログラムや代謝プロファイルテスト等の実施により調査期間中の乳用牛、肉用牛ともに初診件数が減少傾向にあった。なかでも乳用牛と肉用牛の泌尿生殖器病（繁殖障害）と乳用牛の泌乳期病（乳房炎）発生件数が減少した。一方、肉用牛の難産発生件数は増加傾向にあった。【考察】家畜診療の実施により農場の疾病発生状況を把握でき、疾病予防対策等を迅速に指導できるという当所の強みを活かすことで、管内の疾病発生件数の減少につながっている。一方、増体系種雄牛の普及などにより、過大子の難産や胎子失位に対する診療依頼は増加傾向にある。畜産農家の高齢化や農場点在化が刻々と進むなか、家畜防疫業務と並行して、平日、閉庁日、昼夜問わずの診療依頼に対して的確かつ丁寧に対応するための体制や予防獣医療へ取組みの強化が必要。